

やさしさの連鎖

坂戸市立若宮中学校 一年
小島 さら

私には姉がいます。姉は重度の知的障害と発達障害がある障害児です。私が幼稚園の頃母に「障害があってもなくても同じ人間。私は〇〇が姉でよかった。」と伝えたそうです。その時なぜその言葉が自分からでたのか覚えていません。今は部屋を散らかしても片付けられない、おむつも交換してあげなくてはいけない姉を大変だと思うことも正直あります。人懐っこい姉はどこにいつても知らない人に近づいていつては人には伝わらない言葉で話しかけてしまいます。その様子をみて周りの人はどう思うか心配でした。でも、姉が話しかけたりハグをすると一瞬戸惑う人もいますが笑顔で返してくれる人がいっぱいでした。姉は人と笑顔にする力があるんだなと思いました。

私が体験したエピソードを紹介させていただきます。もう今から九年も前の話です。母の実家のある静岡から東名自動車道を使って埼玉まで帰えろうとしたその日は、途中から雪が降り始め御殿場を過ぎる辺りになると雪が激しくな

◇心の輪を広げる体験作文◇

が寝る場所に困っているのを心配してレストランのお兄さんがおばさんに相談してくれたんだよ。」と。パーキングエリアは室内とはいえ人の出入りもあり寒い。私たちを連れて母の困った様子を気にかけてくれたのです。私達は清掃のおばさんの小さな休憩室の温かいこたつに入り一晩を過ごすことができたのです。初めての場所でなかなか眠れない姉をおばさんは優しくトントンス寝かしてくれました。やさしさの連鎖は次の日も続きました。一晩中除雪作業をしていたおじさんが私たちの車の屋根やガラスに積もった雪まできれいにしておろしてくれて、途中でガソリンがなくなったら心配だからと除雪車に使うガソリンを少し分けてくれたという話も母から聞きました。使かわなくなつたタイヤのチェーンまでもゆずつてくれたそうです。母は何度も深く頭を下げてお礼を言っていました。私と姉はおじさんに抱きつきました。仕事を終えて帰えろうとしていたおじさんに「まだ帰っちゃいやだ。」とわがままを言っていたそうです。おじさんの両肩に私と姉を抱きかかえて撮ってもらった写真は今も母の携帯に残っています。その様子を見たおばさんが「あんた達は運がいいよ。こうやって助けてもらえたことはありがたい事だね。今日の事に感謝して自分もいろんな人を助けてあげるといいよ。人は助け合って生きていくんだよ。」と教えてくれました。実はこの後もたくさんの方に助けていただき無事に家に帰る

り視界も悪くなってきました。雪用のタイヤを装着していなかった私達の車は、鮎沢パーキングエリアまでたどりつくのがやっとでそのまま立ち往生してしまいました。パーキングのレストランで母と姉と三人で食事をとりにいきました。車の中でねるのはかわいそうだと思つた母は、レストランのすみっこでやすませてもらえないかと店長さんに相談に行きました。そんな相談をしている間に姉は席から離れ、近くで食事をしていた作業服のおじさん達に声をかけてしまったのです。姉は意見のある言葉をあまりしゃべることができないのでただニコニコしているだけでした。そのおじさん達は除雪作業員の方たちでこれから駐車場の除雪の仕事があるのだと言つて作業に戻つていきました。夜も8時過ぎ、雪はまだ降り続いていました。そろそろ寝る準備をしようとしてるとトイレの清掃のおばさんが声をかけてきました。「こんな所じゃ寝られないよ。おばさんたちの休憩所があるからそこへおいで。あんた達

ことができたのです。

姉の行動がキツカケに心がつながり、やさしさの連鎖になりました。姉はこれからも笑顔で多くの人を幸せにしてくれるんだろうなと思いました。姉の笑顔は人をやさしい気持ちにさせてくれる。私は〇〇が姉で本当に良かったと思つても幸せです。姉にやさしくし、助けてくれる方たちに心から感謝したいと思つています。そして私も感謝を忘れず、困っている人を助けてあげられるやさしさと、声をかける勇氣を持ちたいと思つています。いつか自分の好きなこと得意なことを見つけ人を、幸せにできる人になりたいと思つています。

僕の未来を変えていく

高松市立山田中学校二年
坂本篤宣

僕は進行性の病気の影響で車椅子に乗って生活しています。また、体も徐々に動かしにくくなり、できないことが増えてきました。

そんな僕の学校生活を支えてくれるのが友達や先生です。その中でも、特に関わることが多く、気軽に頼りやすい同学年の友達は、僕が困っていると自然に助けてくれます。しかし、助けるとき以外は、同級生として、変な遠慮なく対等に接してくれます。

ある授業での班活動のときのことです。みんなで神経衰弱をすることになりました。しかし、教室内での広範囲の移動は車椅子では難しいため、移動する方法を考えていました。すると、カードを置く場所を僕の机の上に変えてくれて、無理なく楽しく活動することができました。

また、今年の運動会前に僕は全員リレーで走りたいと担任の先生に伝えました。すると、昼休みに担任の先生を中心に、各クラスの体育委員や足の速い友達が協力してくれ

て、足で走る速さと車椅子で走る速さを比較して有利にも不利にもならない丁度いいスタート位置を見つけることができました。

このように病気だからできないと勝手に考える人より、小さなことも協力的に考えてくれる人がいることで世界が少しずつ明るい方向に変わっていき、いろいろな立場の人が尊重されるのではないのでしょうか。

ただ、病気の僕が親切から感じることはこれだけではありません。僕は、親切な友達に疑問を感じることはありません。

小学校高学年の頃から、本格的な電動車椅子を使うようになり友達から助けてもらえても、自分は助けられないので、なぜこんなに親切にしてくれるのだろうという疑問を感じ始めたのです。中学生になると、助けてもらうことも小学生のときより増えました。それでも友達への対応はあまり変わりませんでした。だから、本当は仕方なく助けてく

れているのではないかと考えることがあります。絶対にそんなはずないと否定したいのに、考えたくない想像が脳裏に浮かんできます。そして、助けてもらえた感謝と親切を信じきれない弱い自分への嫌悪感で複雑な気持ちになっ

てしまいます。それでも、僕とずっと友達でいてくれたなら、僕がもつと自信を持てたなら、いつか心の底から感謝できる日が来ると自分を信じています。実際に、僕が希望を見失いかけたときでも、ここで諦めたら、親切にしてくれた人達が悲しむかもしれないと考え、希望を取り戻したことは幾度となくあるからです。

きつと遠くない未来では、今の友達が助けてくれたことに心の底から感謝できていると強く思います。また、僕も親切をできる限り返したいです。そのために、いろいろなことを勉強して、直接でなくても、人や世界を助けられるような知識を身につけておきたいと思います。人生が急に終わっても、後悔しないように今を大切に生きていくと心に誓います。

過去も、今も、未来も、支えてくれて本当にありがとう。

僕のこれからの宣言書

さいたま市立大宮東中学校二年

田中ことみ

僕は今、中学2年生。小さい頃に自閉症と場面緘黙症だ
とお医者さんに告げられた。でも、その事実を知ったの最
近で、2年くらい前のこと。小学校は通常学級で、障害がな
い子たちと小学校を共に過ごした。

楽しい小学校生活。でも、健常の子たちのなかで、自分だ
け障害があつて、障害告知をされていなかった当時でも、
明らかに自分だけ違うというのを感じていた。みんなに
とつては当たり前で、難なくこなせることが、僕にはすこ
く難しかった。あいさつも、会話も、ずっと座っていること
も、勉強も、先生の話を理解することも。とにかく当たり前
ができなかった。できないことが多すぎて、よく怒られた。

「なんでこんなこともできないの?」

と先生は怒鳴る。

「ちゃんとやつて!」

とクラスメイトは呆れたように言う。

「どうして僕だけできないの!」

が崩れていくことに気づけなかった。それからもう、色
んなことがあつた。学校を歩き渋つたり、自分を傷つけた
り、八つ当たりをしたり、暴れたり、障害のことだけじゃな
くて色々な苦しい出来事やストレスが重なって入院もし
た。そのときは自分というものがわからなくなっていた。
本当は喋らないで無表情なのが自分だったはずなのに、無
理やり喋つて表情を作つた。ただ、普通になりたかつた。健
常の子たちみたいになりたかつた。怒られたり、嫌がらせ
をされるのがイヤだつた。でも、そんな苦しくて大変な思
いをしてまで努力をするのは、自分のためにはなっていな
いから、本末転倒だと気づいた。無理な努力をしないで、必
要な努力だけして、自分らしくいることが、自分にとって
この上ない幸せなのではないかと、今の僕は思う。

そして中学校に進学するとき、僕はあえて小学校の同級
生がいない、少し遠いところにある公立の中学校に進学す
ることに決めた。そしてその中学校では、特別支援学級に
在籍することにした。自分らしく生きる選択を自分でした
わけだ。僕にとつては、大きな決断だつた。今は色々あつて
中学校には行けていないけど、その決断に後悔はない。反
対に、その決断をしてよかつたと思つている。今は、頑張り
すぎないように、自分らしさを取り戻すために、無理に会
話をしないで、自分を落ち着かせる自己刺激行動をして、
大好きな創作をして、楽しく過ごしている。

と自分を責めて、

「自分は出来損ないなんだ」

とあきらめに近いような気持ちを持つた。それでも、もつ
と頑張れば普通になれるかもと思つて、僕は日々、精一杯
努力した。苦手な会話を積極的にして、普通に喋る訓練を
したり、先生の話を一生懸命聞いて、勉強を頑張つたり、些
細なことも一つ一つ頑張つて、人並みには色々なことがで
きるようになって、怒られることも減つた。

僕がどれだけ頑張つたか。たくさん、たくさん頑張つた
から、ここに全ては書ききれないけど、とにかく当時は、す
ごく必死になつて普通というものに近づこうとした。なん
でそこまで普通にこだわる必要があつたのかと、今になれ
ば少し思う。そう思うのは、普通に近づけば近づくほど、心
が削れていくことに気づいたからだ。障害がある人が努力
で健常の人になるなんて、不可能なんだ。必死になつて無
理をして、普通になることに夢中になりすぎて、僕は自分

障害を鬱陶しいイヤな存在だと思ふんじゃなくて、「障
害があつてよかつた」と少しずつ思い始めている自分が誇
らしい。自分が抱えている障害について、「努力で治せ」な
んて言う人もいるけど、そんなこと言う人のことは気にせ
ずに、自分を理解してくれて、障害があることをわかつて
くれた上で優しく接してくれる人との関わりを大切にし
たいと思つた。最後に、僕はこの治らない障害と共に人生
を歩んでいくと思うけど、障害があることを隠さずに、障
害の特性を無理な努力でなくそうとせず、自分らしく生
きることをここに宣言する。